

※解答はすべて解答用紙に記入しなさい。問いに字数の指定がある場合は、句読点や記号も一字に数えて解答すること。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお①～⑬は形式段落の番号です。

① 私は『テルマエ・ロマエ』の第1話で、古代ローマの設計技師ルシウスが最初にタイムスリップした日本の銭湯を、1977年に設定しました。その後連載が決まり、編集者のアドバイスを受けてタイムスリップ先の舞台を現代に移したので、初回だけ設定が昭和50年代の東京になっています。

② ルシウスのタイムスリップ先を昭和に設定したのは、あの時代なら風呂から突然外国人が現れたとしても、「変な外人さんがいる」と、なんだかんだでまわりも受け入れると思ったから。あの当時は、寅さんや「トラック野郎」シリーズ（鈴木則文監督）の星桃次郎のような素っ頓狂な人が映画の主人公になっていた時代で、戦中戦後に人々が向き合わされた、何も思い通りにならない現実や社会の無秩序の経験が、まだ人々の中に生きているように感じられたからです。現代であれば、風呂からいきなり外国人が現れても人々は見て見ぬ振りをし、その後SNSに「風呂から突然外人出てきた、ヤバイ」みたいな書き込みをして終わるのかもしれませんが。

③ その世代の人たちの「世の中は思い通りにならない」「何があっても落ち込まない」のレベルには瞠目すべきものがあります。子どもの頃に壮絶な経験と向き合ってきた戦中世代のおぼあちゃんたちには、「落ち込んでなんぼ」の精神が宿っていて、大概のことでは動じません。多少の失敗をしたところで、「だからなんだってんだよ、どうってことないじゃないか、そんなこと！」とダイナミックな解釈を展開していく様を、私は傍で目撃してきました。

④ 戦争を経験した世代の日本人の多くは、国土が焼け野原となって、何にもなくなったところから木の根をかじって飢えを凌ぎ、這い上がってきた人たちです。うちの母も戦前、裕福な家庭で育った深窓のお嬢様でしたが、戦争でいきなり何もかも失った人です。あまりに理不尽な環境の変化ですが、当時の人は大なり小なりそのような経験をして「人生は思い通りにならない」という①を浴びたのです。

⑤ しかも自然災害のような天災でなく、人間が起こした戦争という、非常に不条理な事態によってそれが引き起こされた。誰かの指図で命の選択がなされ、何も悪いことをしていなくても「おまえは死んでいい」と人々は一方的にジャッジされてしまったのです。

⑥ 何の倫理も意味をなさない、そんな現実に向き合うしかなかった人々は皆、「生きるって何なんだ」という、宗教者が哲学者が深く追究するような②的な問いを、おそらく一度は考えたことがあるのではないのでしょうか。少なくとも女学生だった母は考えていたようです。

⑦ パンデミックというまったく違うものを通じてではありませんが、今の私たちも、不条理な理由で死ぬかもしれないという危機感を身近にした時代にいます。戦中、戦後のように木の根をかじって生き延びる状態とは異なりますが、目に見えない微小なウイルスに対して、想像力を使わなければ、そのリスクを管理し、状況を理解することができないという③度の高いハードルを与えられています。

⑧ そんななかで「人生とは思いつりにならないもの、どんなことでも起こり得るもの」という母たち世代の考え方は、一つのヒントになるように感じています。実際に私自身もその考えを受け継ぎ、それを基本軸として、これまでの人生をサバイブしてきました。

⑨ 私たちは家族にしても、結婚や子どもの生き方にしても、そのあり方を「普通はこうあるべき」と世間でつくられたマニュアルを軸に考えてしまうところがあります。そのために、たとえば母親が自分の思う通りに動いてくれないければ、その子どもは「母親らしくない」「母親のくせに」などと寂しさを募らせます。また親は子どもに「せっかく育ててあげているのに、ちっとも親コウコウしてくれない」と腹だたしさをぶつけるようになる。学校でいじめられれば「なぜいじめられるようなことをしたの」と弱者である子どもでなく、社会の側につく親も少なくありません。無難な既成概念にすぎり、まわりと比較をし、自分の思い通りにならないことに腹を立てるのです。

⑩ しかし、落ち込み続けることは最終的に時間の無駄で、何の解決にも結びつかないという姿勢をカクリツしていた母の生き方を見てきた私は、「この世界で生きていく限り、どんな思いがけない展開もあり」という心構えを前提に生きていくべきだと思っているわけなのです。

⑪ そんな私も、母が認知症の兆候を見せ始めたときは、「お母さんどうしたの、すっかりしてよ！」と彼女を責めてしまいました。母と言えば聡明な人、というフォーマットができ上がっていたので、そのあり得ない展開に動揺したのです。今は深く反省していますが、その反応も、きつと自分の思い描く母の姿との乖離を受け入れられなかったからだと思います。

⑫ 現代の日本は「不条理」をはじめ「失敗」も「屈辱」も生きていくうえで必要のないもの、知らないほうがいいもの、という社会環境になっています。でもそれは、人間が本来もっている強さや臨機応変性や適応能力を脆弱化させていくことになる。「人生とは目的を掲げ、それを成就するための計画を練り、全うできるように頑張るのが正しい生き方」「夢や希望にむかって突き進む人は美しい」という思い込みに囚われてしまうと、様々な事情でそうならなかったときに、自分に大きな失望を抱くなど、大変な思いをすることになるでしょう。家庭の期待に応えることも喜ばすこともできない自分を恥じ、社会に適応できない自分を恨み、自らを追い詰めてしまうことにもなりかねない。

⑬ しかし、そもそも人間の人生とは思いつりにならないものであり、どんな顛末も現象も起こり得るということを理解していれば、もつと楽に生きていけるはずなのです。パンデミックのストレスなのか、昨今、多くの人が小さなことに深く悩んだり誰かを傷つけやすくなっている傾向が強くなっていますが、切羽詰まった時、社会も人間もそう思い通りにならないのが人生だ、と思いついてみるだけでも、いくらか前向きになれるはずです。

(ヤマザキマリ「たちどまって考える」による)

注(1) 瞳目 … 驚いて目を見開くこと。

(2) パンデミック… 感染症の世界的流行。

(3) サバイブ … 生き残ること。

問一 線部①の漢字は読みを答え、②・③のカタカナは漢字に直しなさい。

問二 本文中の 1 3 に入れるのに適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア 根源    イ 難易    ウ 具体    エ 洗礼

問三 線部の「思い込み」と本文中の意味合いが異なるものを、線部 a d の中から一つ選び、記号で答えなさい。

問四 線部(1)とありますが、そのようにしたのはなぜですか。それを説明した次の文の に入れるのに適当な表現を本文中から四十字以内で探し、その最初と最後の五字を抜き出して答えなさい。

昭和という時代は、ので、風呂から突然外国人が現れたとしても、人々は動じることなく受け入れると思っただから。

問五 線部(2)の指示する内容を答えなさい。

問六 線部(3)のように筆者がなったのはなぜですか。それを説明した次の文の 1・2 に入れるのに適当な表現をそれぞれ答えなさい。ただし、1 は五字以内、2 は漢字二字で答えなさい。

筆者には母親に対して 1 だという思いがあり、その思い描く母親の姿と 2 の姿との間にかけて離れた違いを感じて、受け入れることができなかつたから。

問七 本文を起承転結の四つに分けて、承を③から、結を⑫からとしたとき、転はどこから始まりますか。段落番号を答えなさい。

問八 本文について話し合っている四人の対話を読んで、に入れるのに適当な表現をそれぞれ答えなさい。ただし、123は本文中から抜き出し、4は適当な言葉を入れて、ことわざを完成させなさい。また3は二十五字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を答えることとします。

林さん 僕は歴史が好きだから、『テルマエ・ロマエ』は読みました。古代ローマの公衆浴場やトイレ事情など興味深かったです。実写化されて映画にもなっているから、そちらで知っている人もいるのではないかな。

南さん 筆者は、イタリアで長く生活しているようですが、外国で暮らしていると、日本の常識が通用しない経験も多いでしょうね。思い通りになると思っていて、ならないと苦しい。だから思い通りにならないのが「普通」だと考える方がいい、という筆者の意見は実体験からきているんでしょうね。

小林さん 人生は楽しい経験ばかりじゃない。本文にもあるように、1や2のような思い通りにならない苦しい経験は、生きるうえで必要だと私も思います。思い通りにいかないからこそ、そこからどうしたらいいか学んで人は成長するんじゃないでしょうか。

石川さん いいこと言いますね。そういう負の経験によって、本文でいう3を人は養っていくということなんでしょう。その結果として、深い人間性と知恵をもった大人になれるのなら「苦労は買ってでもしろ」ですよ。

林さん 石川さんもいいこと言いますね。僕たちも「七転び4」の精神でしぶとく生きていきましょう。なんだからもう一回、あの漫画が読みたくなってきました。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

主人公「穂積怜」は高校三年生で、同級生の「丸山和樹（マルちゃん）」とともに美術部に所属している。「森川心平」も同級生で、最近、指を骨折してしまった。

「どした？ なんかあった？」

「ううん……」

力なく首を振った丸山は、気を取りなおしたようにあえて明るく、「怜も風呂行かない？」と持ちかけてきた。怜はすでに夕飯まえ、家の風呂に入っていたが、もちろん、「いいね。ちょっと待ってて」

と答えた。急いで二階に上がり、風呂の道具をそろえて、また階段を駆け下りる。

丸山は洗面器を抱え、店のまえでうつむきかげんに立っていた。怜はシャッターを半分だけ下ろし、丸山と連れだって、商店街のなかほどへと歩きだした。

「餅の湯」は、五、六人も入れればみちみちの浴槽しかない、古くてこぢんまりした公衆浴場だ。商店街の住民が当番制で清掃や管理をすることで、ほそぼそとつづいてきた。地元住民は木札を見せれば一回百円で入れるし、観光客

も三百円を払えば利用できる。

源泉かけ流しで泉質がいいので、「この湯に浸からないと一日が終わらない」と言う近所の高齢者は多かった。長年「餅の湯」を利用してきたおばあさんたちは、たしかに年齢のわりに肌がつやつややしている。そんな彼女たちが、商店街で店番をするついでに「餅の湯」の効能を観光客に吹聴するのだから、説得力がある。最近では、旅館やホテルをチェックアウトしたあと、帰りがけに「餅の湯」へ立ち寄る観光客もちらほらいた。タイル貼りの浴槽や、旧式の蛇口がついた狭い洗い場、二階にある畳敷きの休憩所と檜の格天井など、レトロなつくりが「かわいい」と人気なのだそう。

とはいえ、怜と丸山が「餅の湯」をオトズれたときには、あと三十分ほどで営業時間が終わる頃合いだったからか、男湯にほかに客はいなかった。出入り口の引き戸を開けてすぐ右手にある、二畳ほどの事務スペースで暇そうにテレビを見ていた金物屋のおじさんに代金を渡し、下駄箱に靴を収める。

手早く髪と体を洗い、二人そろって湯船に浸かると、自然と「ふいー」と声が出た。この湯は無色透明だが、ほのかに海の香りがし、舐めると少ししょっぱい。

『餅の湯』に來た夜つて、布団に入るとなんか足がむずむずするときがある」

と、怜は洗い場に立ちこめる湯気を見ながら言った。

「俺もある。血行がよくなるからかな」

「見た目はふつうのお湯と変わらないのに、温泉って不思議だね」

会話が途切れ、怜は隣にいる丸山をさりげなくうかがった。丸山は電灯を映して揺れる湯面を眺めている。ふくふくとした耳たぶが熱気のせいで少し赤くなっている。

「俺さ、自分がいやになったよ」

しばしの沈黙ののち、丸山が静かに話しだした。

「どうして」

「心平が美大受けることにしたの、知ってる？」

「いや、初耳」

怜はびっくりし、湯のなかで丸山のほうに体を向けた。「いまからやってまにあうものなの？ デッサンとか大変なんだろ」

「山本先生も驚いたみたいで、俺や美術の林先生にいろいろ聞いてきたよ」

山本先生の慌てぶりを思い出したのか、丸山はちよつと笑った。「俺が通ってる丘の麓の絵画教室を紹介してあげた。心平は部活があるから土日しか来れないし、まだ初級者コースだけど、デッサンはどんどんうまくなってる」

「学科だってあるのに、あいつなに考えてんだ」

「そっちはまた俺たちがトクンしてあげればいいんじゃない」

丸山はあくまでも鷹揚である。「怜もこのあいだ、心平が粘土で作った馬の埴輪を見たでしょ。才能ってこういうことなのかなあって、俺はつくづく思った」

「もしかして心平、土器づくりが楽しかったことを思い出して、美大を受けるなんて言いだしたの？」

「詳しくは聞いてないけど、そうなんじゃないかな。絵画よりは陶芸とか彫刻とか、立体物に興味があるみたいだったし」

お湯から出した手で顔をぬぐった丸山は、ついでに表面張力を楽しむように、掌で二度ほど湯を叩いた。その行為に、丸山にしてはめずらしいいらだちを感じて、

「だけどうして、マルちゃんが自分をいやになるんだよ」

と、怜はおずおずと尋ねた。

「心平が指を骨折したって聞いたとき」

丸山は低くかすれた声で言った。「俺はまっさきに、『じゃあしばらくデッサンの練習できないな』と思った。その

まま美大受験に飽きてくれればもつといいのにつて喜んだ」

怜は咄嗟に言葉が出なかった。そうか、マルちゃんは心平に嫉妬して、でもそんな自分がたまらなくいやなんだ。

二月にあった文化祭で、丸山が出品した絵が思い浮かんだ。ずっと取り組んでいたその油絵は、餅湯城と青い海が描かれているはずだったが、怜がしばらく部活をさぼっているあいだに、夜の海と丘のてっぺんに白く浮かびあがる不吉な廃墟に変じていた。キャンバスのうえで、闇からじむ暗紫の波濤が逆巻く。マルちゃん、新境地だな、と怜は呑気に思ったものだが、あれは自身に対する不安やあせりを感じた丸山の、荒々しい心象風景だったのかもしれない。

怜はといえば画用紙に適当に絵の具を塗りたくり、抽象画だと言い張ってお茶を濁した。

「マルちゃんはずっと真剣に絵を描いて、美大を目指してきたんだから、ちらつとそんなふうにも思っちゃうのも当然なんじゃないの」

「でも、骨折だよ？ 大怪我だ。なのに一瞬でも喜ぶなんて、ほんとサイテーだ」

「いや、カンチョーが原因の骨折だし……」

なんとか丸山の気持ちを楽しみたくて、怜は必死になだめようとしたが、

「いいんだ、怜」

と丸山は立ちあがり、浴槽から出ていく。「とにかく自分のサイテーぶりをだれかに聞いてほしかっただけで……」  
そこまで言って、丸山は洗い場にしゃがみこんでしまった。

「マルちゃん!？」

どうやら湯あたりを起こしたらしい。怜は慌てて洗い場に飛びだし、シャワーなどという洒落たものは「餅の湯」にはないので、蛇口から洗面器に冷水を汲んで丸山の頭からかけた。

「マルちゃん、しっかりしろ！ おじさーん、ちよつと来てくださーい！」

金物屋のおじさんとキョウリヨクし、丸山を脱衣所にかつぎだした。おじさんが持ってきてくれた貸し出し用のバスタオルで丸山をくるみ、板張りの床に横たわらせる。おじさんと二人がかりで団扇で扇いでいたら、ややあって丸山が意識を取り戻した。

「マルちゃん、大丈夫か」

「うん、ごめん。なんかクラツとした」

「よかったよかった。長風呂もほどほどにしないとな」

と、おじさんは餅湯温泉サイダーを怜と丸山におごってくれた。「ちよつと休んでから帰りなさい」

おじさんは表の電気を消し、浴槽の湯を抜いて掃除をはじめ。怜は持参したタオルを腰に巻いた格好のまま、丸山のかたわらにしゃがみこんだ。丸山も身を起こし、二人は脱衣所で冷えたサイダーを少しずつ飲んだ。

「またあの感じがする」

と丸山が唐突につぶやいた。「なんだか死んじゃったあとみたいな」

「えーと、具合悪い？」

気分だけでなく頭の具合も悪くなったのかと、怜は怖々と尋ねたのだが、

「大丈夫。かえってさっぱりした気持ちだよ」

と丸山は言った。「そういうとき、たまに不思議な感覚になる。俺はもうとつくに死んで、いま怜と話しながらサイダー飲んでるのも、生前のことをあの世で思い返してるだけじゃないかって気がしてくる」

「へええ」

「怜はそういうことない？」

「ない、かなあ……」

やつぱりマルちゃんは繊細だ、と怜は感心した。駅前広場で重吾と遭遇したとき、まわりのすべてが遠のき、冷たく静かな死後の世界に入りこんでしまった感じはした。でも、丸山が言っているのは、たぶんそれとはちがうだろう。

もつと親密で、満たされてあたたかな感覚。マルちゃんを感じる疑似死後に俺も存在してるんだなと思ったら、<sup>(4)</sup>指さきは不可思議な充足感でぬくもった。あるいは、単純に温泉の効果かもしれない。

黄色い光を投げかける電球が、じじ、じじ、と天井で鳴っている。餅湯にはLEDではない照明がたくさんある。

「俺はマルちゃんのこと、サイテーなやつなんて思わない」

気<sup>き</sup>恥<sup>は</sup>ずかしかつたが、怜は思いきつて言った。「むしろ、<sup>(5)</sup>いいやつだと思ってる。いままでも、美大の話を聞いたあとも」

怜とてだれかに嫉妬するほど経済学部を志してみたものだが、到底無理だ。絵を描くことに対する丸山の情熱、秘められたうねりは、怜にはまばゆく感じられた。そんな情熱を抱<sup>か</sup>えながらも、心平の降<sup>わ</sup>って湧いたような美大受験話に対して親身に相談に乗ってやり、才能を認め、自身の物思いを醜<sup>みにく</sup>いと嫌<sup>けん</sup>悪<sup>お</sup>する丸山の優しさ、誠実さを、好ましく受け止めこそすれ、いやだなと思うはずもない。

丸山はサイダーを飲み干し、

「そうかな……。さんきゅ」

と照れくさそうに言っつて、小さくげっぷをした。

(三浦しをん「エレジーは流れない」による)

注(1) 鷹揚 … 小さいことにこだわらず、ゆったりとしたさま。

(2) 重吾 … 怜の父親の名。それまで会ったこともなかった。

問一 —— 線部①～③のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 ～～ 線部とありますが、「お茶を濁す」の意味として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア おしきる    イ ごまかす    ウ ふざける    エ じまんする

問三 —— 線部(1)とありますが、「丸山」が自分をいやになったのはなぜですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 心平がデッサンを上達させる姿を見て、絵画教室を心平に紹介しなければよかったと考えるようになったから。

イ 心平が得意とする陶芸や彫刻などの立体物の制作については、自分の能力では勝てないと考えているから。

ウ 心平が骨折したことでデッサンの練習ができなくなり、その間に自分の方が上達できると考えているから。

エ 心平が骨折したとき心配するどころか、骨折をきっかけに美大受験を諦<sup>あきら</sup>めないかなと考えてしまったから。

問四 —— 線部(2)とありますが、この時の怜の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 丸山の言いたいことがはつきりと分かってきたが、自分には丸山をなぐさめる資格はなく、丸山に何と声をかけたらいいか迷っている。

イ 丸山が心平に対して怒<sup>いか</sup>りを感じていることが心配で、友人関係がくずれてしまわないように、丸山の気持ちをなだめようとしている。

ウ 普段<sup>ふだん</sup>と異なる丸山の様子が気になり、詳しく知りたいが理由がはつきりしないため、どのように聞けばよいかと慎重<sup>しんちょう</sup>になっている。

エ 乱暴な様子の丸山に驚き、いらだちの原因も分からず恐<sup>おそ</sup>れを感じているが、丸山の気持ちを知りたいという思いを抑<sup>おさ</sup>えられないでいる。

問五 —— 線部(3)とありますが、この絵について「怜」の考え方の変化を説明した次の文の [1] の考え方の変化を説明した次の文の [1] ・ [2] に入るのに適当な表現をそれぞれ答えなさい。ただし、 [1] は本文中から五字で抜き出し、 [2] は当てはまる表現を考えて書きなさい。

はじめは丸山の絵を見たとき、 [1] ととらえたが、今では [2] を感じた丸山の心の中の景色が表現されたものだったのかもしれないと思うようになった。

問六 —— 線部(4)とはどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 年老いて死んだ後に、あの世でサイダーを飲みながら昔のことを語り合う二人を想像して楽しくなっているということ。

イ 冷たく静かな死後の世界に入り込んでしまった自分を、あたたかな現実の世界に丸山が連れ戻してくれ、救われた気分になったということ。

ウ 湯あたりを起こしてしまっほど長い時間湯船に浸かっていたため、意識がはっきりせず丸山の話でさらに夢見心地な気分になったということ。

エ 丸山が感じている死後のような世界に、自分という存在が当たり前のように受け入れられていることをうれしく感じているということ。

問七 —— 線部(5)とありますが、どのような点から「いやつだと思っっている」のですか。「嫉妬」「怪我」の二語を必ず用いて七十字以内で説明しなさい。

問八 本文を読んだ生徒たちが、気づいたことを発表するようになりました。次のア～エは発表のために準備したメモです。本文の内容から読み取った内容としてふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本文にくり返し描かれている電灯が、「怜」と「丸山」の間にある重く苦しい雰囲気(ふんいき)を、明るく豊かにすることにつながっています。また、商店街の人々が力を合わせる姿も、この場面の和やかな雰囲気につながっていると思います。

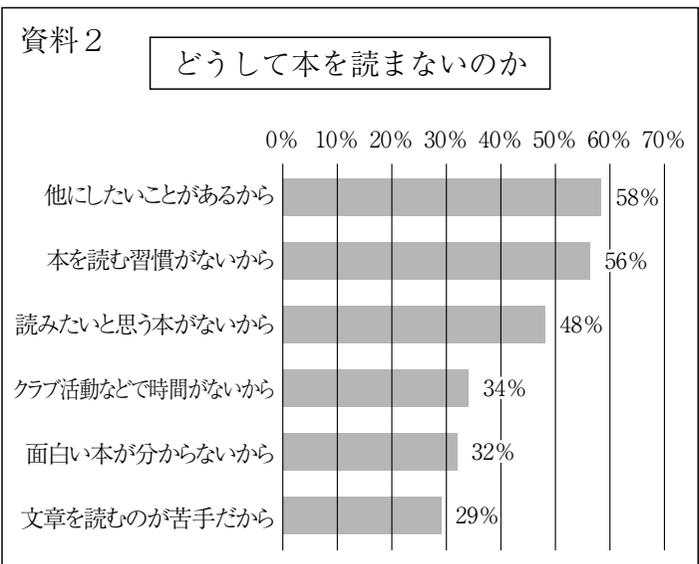
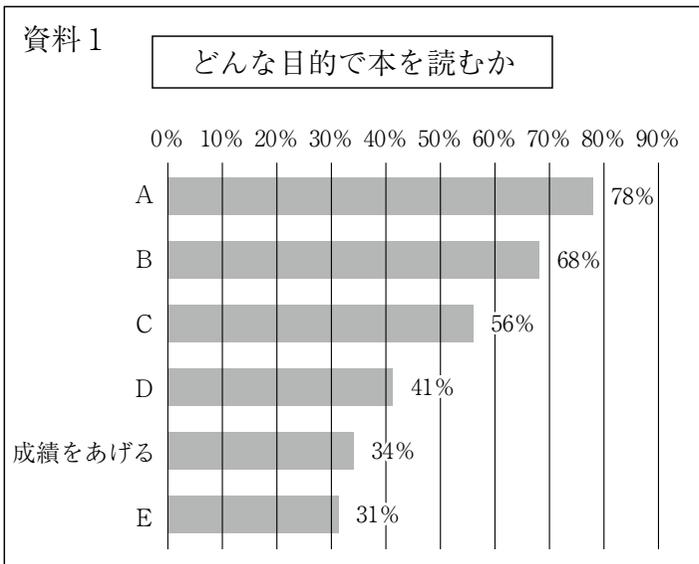
イ 「心平」は型にはまらない自由なタイプのように感じました。一方、「丸山」は前々からずっと美大を目指して頑張っている人物なので、この二人は、少し対照的だなと思いました。

ウ 「餅の湯」は二人が通い慣れていて、打ち解けた場所だから「丸山」は「怜」に心の内をさらけ出しやすかったのだと思います。また、サイダーのような身近なものが出てきて、読者に銭湯の場面をより想像しやすくしていると思います。

エ 「怜」は「丸山」を誠実でいやつだと思っっているけれど、「怜」自身も丸山をよく見ていて、気づかいてくれる人物だと思っています。お風呂に二回入ったり、湯船でいらいらしている丸山に気付いていたりするところから思いました。

三 次の各問いに答えなさい。

(I) 岡山小学校の図書委員会に入っている妹尾<sup>せのお</sup>さんは、図書室の本の貸し出し冊数が少ないことが気になっていました。図書委員会で話し合いをした結果、二期の目標は「図書室の本の貸し出し冊数を増やす」にしました。そこで、まず妹尾さんたちは、岡山小学校の児童に読書についてのアンケートを行いました。資料1と資料2はアンケート結果のグラフです。これを見て後の問いに答えなさい。



問一 次のア～オは資料1「どんな目的で本を読むか」の質問に対する回答項目です。後にある[ ]の情報をもとに、資料1のA～Eに当てはまるように項目を並びかえたとき、AとCに該当するものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア 「興味・関心を深める」
  - イ 「課題や宿題などで必要がある」
  - ウ 「知らないことを調べる」
  - エ 「気分てんかんや暇つぶし」
  - オ 「本の内容を楽しむ」
- 「本の内容を楽しむ」と「気分てんかんや暇つぶし」の項目が上位二つに入っている。  
「気分てんかんや暇つぶし」は「成績をあげる」の二倍の人が回答している。  
「課題や宿題などで必要がある」ために本を読むと回答した人が一番少ない。  
「興味・関心を深める」ために本を読む人は、「知らないことを調べる」ために本を読む人よりも少ない。

問二 アンケートの結果をもとに、図書室の本の貸し出しを増やす取り組みを図書委員会で話し合いました。次のア～エは取り組みの内容です。資料2で分かったことをもとに考えられた内容として誤りを含んでいるものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア クラブ活動などで時間がなく、本を読む習慣がないという人が多いので、朝の会で毎日読書をする時間をつくる。
- イ 読みたいと思う本がないという人が多いので、様々な分野のおすすめの本を紹介する冊子を作成し、全校児童に配る。
- ウ どの本が面白いかわからないという人がいるので、毎月図書室だよりを発行し、人気図書ランキングを載せる。
- エ 文章を読むのが苦手だから本を読まないという人がいるので、どこでも手軽に読むことができる電子書籍を紹介する。

国語問題

(一〇枚のうちの九枚め)

問三 妹尾さんは、図書委員会の新しい取り組みを全校児童に放送で伝えることにしました。その放送に向けて作成した原稿の  部分は、誤った言い方になっています。正しい言い方に直しなさい。

みなさん、こんにちは。図書委員会の妹尾です。今日は、図書委員会からみなさんにお知らせがあります。先週、図書委員会で話し合いをしました。その中で、特に話題になったことは、本の貸し出し冊数が少ないです。そこで図書委員会のメンバーで、岡山小学校のみなさんにもっとたくさん本を読んでもらうために何ができるか考えました。今日はみなさんに3つの新しい取り組みを紹介したいと思います。まず1つ目は…  
(中略)  
以上です。  
1人でも多くの方が図書室に来てくれることを楽しみに待っています。  
図書委員会からのお知らせでした。

(Ⅱ) 次の小問に答えなさい。

問一 次の①～⑤の  にそれぞれ共通して入る体の一部を表す漢字一字を答えなさい。

- ① 揚げ  を取る       止めを食う       並みがそろう
- ②  が高い       につく       で笑う
- ③  に負えない       がかかる       をぬく
- ④  が利く       が肥える       を配る
- ⑤  が上がらない       を抱える       を冷やす

問二 次の  —— 線部①～③の誤りを正しく直して漢字で書きなさい。

- ① 学校のプールを地域の人々に解放する。
- ② 感染症対策の強化を測る。
- ③ そろばん三級に任命された。

問三 次の①・②の  にそれぞれ適当な漢字一字を入れて、タテヨコの熟語を完成させなさい。

